

知られざる  
ヴィジュアル系  
バンドの世界

冬將軍

90年代、多くの若者が熱狂した

「**ヴィジュアル系**」は

どう誕生し、なぜ独自の

「**ジャパンカルチャー**」

として**発展**したのか？

『ROCK AND READ』『ヘドバン』等で活躍する気鋭の音楽ライターが実像に迫る！



知られざるヴィジュアル系バンドの世界

冬將軍

星海社

229



SEIKAISHA  
SHINSHO



はじめに

ヴィジュアル系は音楽ジャンルを指す言葉ではないし、ひとくちにヴィジュアル系といっても、そのスタイルは多種多様だ。ビシッとキメ込んだ硬派なビートルロックから、漆黒を纏った墮天使<sup>①</sup>、神に遣わされし救世主<sup>②</sup>などという中二病よろしくの耽美なゴシックロック、中性的な美男子が奏でる華麗でポップなニューウェイヴ、はたまたド派手な髪を振り乱したヘヴィメタル……というように、その見せ方も音楽も自由であり、さまざまジャンルを内包しているのがヴィジュアル系である。Visual Kei<sup>③</sup>として海外で認知されるようになったのも、他の言葉では説明できない、独自に発展した「ジャパンカルチャー」であるからこそだろう。

私は以前、音楽事務所でヴィジュアル系バンドのA&R兼制作ディレクターを務めていたことがある。A&Rとは、アーティスト・アンド・レパトリーの略で、アーティストの発掘、育成、そしてアーティストの売り出し方における方向性を決める職務だ。片や制

作ディレクターというのは、原盤制作における責任者、つまりはリリース音源をレコーディングするための一切を取り仕切る仕事である。スタジオなどのスケジュール管理からエンジニアの手配、機材管理など、そこにまつわる予算管理をする。それぞれ別の人間が担当することもあるが、1人で兼任する場合も少なくない。

そこで私は音源制作のクオリティを求めるために、衣装やミュージックビデオといったほかの制作予算を削ってレコーディングに回そうとした。すると上から「衣装とミュージックビデオに金を掛けられないなら、ヴィジュアル系なんてやめちまえ！」と怒られてしまった。そこでハツとした。そうなのだ、単純に音楽のみを突き詰めたのであれば、ヴィジュアル系である必要はない。しかし、だからといってヴィジュアル系バンドが、それ以外のバンドに比べて音楽を疎かにしているとか、劣っているとか、そういうわけではない。そもそもレコーディングの予算を上げれば、いい音楽が作れるという保証などないのだ。

ロックとアート、ファッションは古くから切っても切れない関係にある。このアルバムを表すアートワークはどんなものがいいたろう？ ミュージックビデオはこういった映像ではどうか？ ライブではオーディエンスをどう魅了していく？ そのためには何を着れ

ばいい？ 髪型は？ ……そうやって自分たちの表現したい美学をサウンドだけでなく、視覚的にも表現していく。その究極形態がヴィジュアル系だ。ロックバンドとしてのエンターテインメントにおける総合芸術の極みと言っている。

80年代後半に巻き起こったバンドブームにおいて、多くのバンドはそうやって己の美学を追求していった。当時は「オケバンⅡお化粧バンド」などと言われていたわけだが、そうやって、ヴィジュアル系シーンが出来上がっていったことは必然だったように思える。

90年代は音楽シーン全体が激動期だった。バブル景気真っ只中に始まり、音楽メディアはレコードからCDへと移り変わった。カラオケが流行り、CMやドラマのタイアップ曲がヒットチャートを賑わせ、TKブームにビーイングブーム、ミリオンヒットが連発する「CDバブル」が到来した。一方で海外を見ればオルタナティブロックの隆盛があり、ブリットポップブームがあった。そして、日本で本格的な音楽フェスが開催され、日本のバンドが海外アーティストと同じステージに立つことが当たり前になった。歌謡曲やニューミュージックと呼ばれていた日本の音楽シーンのなかで、ロックが市民権を得て、根付いた。それが90年代だ。そうした目まぐるしく移り変わっていった時代に、ヴィジュアル系は生まれて、発展していった。

2022年現在、そうした90年代のヴィジュアル系黎明期に活躍したバンドは、「レジェンド」として、ヴィジュアル系のみならず多方面のバンドやアーティストからのリスペクトを受けている。しかし、彼らが「ヴィジュアル系のパイオニア」として、確固たる地位を得たのは、00年代後半以降の話でもある。それまでには多くの偏見や誤解があったし、90年代後半にヴィジュアル系がその言葉とともに広く浸透する裏側には、蔑称としてのヴィジュアル系があったことも事実である。

今なお、ヴィジュアル系は偏見を持たれたり誤解されることも多い。メインストリームではなく、オタク文化と同様に一部の偏愛嗜好として見られているところもあるだろう。ゆえにヴィジュアル系をまだ知らぬ人にとってはまったく未知の異世界のことなのかもしれない。いや、異世界ではなく、深淵しんえんの闇といったほうが正しいか。だが、それがいいところでもある。良くも悪くも、そうした閉塞感があるからこそ、その深淵に堕ちてしまえば居心地の良さを感じることもあるし、「今に見てろ」と野望を抱いている節もある。それは演者はもちろんのこと、そのファンも同じなのである。以前、テレビ番組『マツコの知らない世界』（TBS系列）のヴィジュアル系特集で飛び出した言葉に思わず膝を打った。

「日常を闘うために非日常を愛してる」……まさにこれこそがヴィジュアル系ファンの真理であると思う。

本書は90年代にヴィジュアル系がどう誕生して、多くの人にどう受け入れられ愛され、時に疎まれ、そして、なぜ世界がうらやむほどのジャパンカルチャーになったのか……そこを紐解いていきたい。単にヴィジュアル系史を辿るクロニクルではなく、他シーンとの関わりを見ることで、この特異なシーンをより深く知ることができるとは思わない。当時を知らない若い世代は先駆者たちの伝説と葛藤を知り、当時を知る者は懐かしく思ってもらえれば幸いである。

個人的には、日本のロックシーンはヴィジュアル系を軸に発展してきた、と言い切ってしまうのも過言ではないと思っている。それくらいヴィジュアル系は面白い。

さあ、その深淵の闇へ、共に堕ちていこう。

本書の中には、80〜90年代の時代背景を反映した差別的な語句や、人、性別、文化に対する否定的かつ不適當な表現があります。しかし、著者と編集部はこのような差別に対して反抗し抗う意図のもと、当時を語るために必要なものとして掲載しています。

本書の人名は敬称略とさせていただきます、地名、固有名詞の表記は基本的に慣例に従っています。

アルバム、シングルともに作品名を指す場合は『二重カッコ』、曲名を指す場合は「カッコ」で表記します。



目次

3 はじめに

14 #1

ヴィジュアル系が  
カッコ悪かった頃

---

30 #2

ファッションで辿る  
ヴィジュアル系黎明期

---

46 #3

音楽的要素で紐解く  
ヴィジュアル系ロック

62 #4

サディスティカルで  
ポジティブな  
ゴシックロック

---

80 #5

バクチク現象と  
ヤンキーイズム

---

100 #6

東のX、  
西のCOLOR

---

126 #7

1993年  
「黒服系総洋楽化」  
インダストリアルな世界

142 #8

日本で生まれた  
独自のロック  
“ミクスチャーロック”

---

162 #9

ビーイングの  
J-ROCKと  
BOØWY  
ビートルock神話

---

184 #10

“布袋派 VS hide 派”に  
始まった、シグネチャー  
ギター物語

202 #11

hideとはいったい  
何者だったのか

---

220 #12

あの橋の上で逢いましょう  
～バンギャルクロニクル

---

238 #13

ヴィジュアル系四天王と  
ヴィジュアル系世紀末

---

258 #14

ヴィジュアル系が  
カッコ悪くなくなった今

280 おわりに

283 巻末付録 バンドプロフィール

ル系が

---

かった頃

---

#1

ヴェンジュア

---

カッコ悪

---

今でこそ、XやLUNA SEAは90年代ヴィジュアル系のレジェンドとして扱われているが、「昔、XやLUNA SEAを聴いていた」と公言するのが恥ずかしく思えたり、外資系CDショップにはヴィジュアル系バンドのCDが置かれていない、というウソのような本当の時代があった。私のような、いわゆる90年代初頭のヴィジュアル系黎明期が青春だった黒服系直撃世代はそうした「蔑称としてのヴィジュアル系」を体験してきた。

「ヴィジュアル系」の語源だとか、誰々がパイオニアであるとか、それはのちの世から遡って推測しているだけにすぎず、少なくともXもLUNA SEAも、当時は自分たちのことをヴィジュアル系だなんてひとことも口にしていないのである。尤もヴィジュアル系は90年代初頭には確立されていなかった言葉であるのだから当然だ。

ヴィジュアル系が世間に広く認知されたのは90年代後半のこと。1996年10月にテレビ番組『Break Out』（テレビ朝日系列）がスタートした。番組内で、SHAZNA、La'cryma Christi、MALICE MIZER、FANATIC◇CRISISが「ヴィジュアル系四天王」と呼ばれ、お茶の間にも認知されていく。と同時に、その上の世代であるBUCK-TICKやXが彼らと同線上で、ヴィジュアル系のパイオニアとして語られるようになっていった。

「ヴィジュアル系」という、見た目だけで語られてしまうようなその言葉は、「音楽を正当

に評価してもらえなくなる」という恐れがあった。実際にそういう捉え方をされていたことも事実である。

「音楽に自信がないからメイクをしているのでは？」

「音楽よりも見た目重視のバンド」

メディアがこぞって持て囃したブーム、といった商業主義的なものも重なって、どこか茶化されている気分にもなり、ヴィジュアル系として括られることを嫌うバンドも多かった。それはファンも同様だった。

BUCK-TICKやXがデビュー当時、奇抜なビジュアル面から注目されたのは紛れもない事実だ。しかしながら、それは音楽と同じ自己表現のひとつでしかなく、何よりヴィジュアル系という言葉が広まりつつあったとき、彼らはもうビジュアル云々で語る領域にいないことは誰の目にも明らかであった。

今となってはBUCK-TICKもXも、ヴィジュアル系のレジェンドとしてこうして並べて語ることもできるわけだが、当時のファンは相容れないバンド同士として見ていたところもある。BUCK-TICKを筆頭とするゴシックな、いわゆる“黒服系”と呼ばれたバンドの

美学といえば、「消えてなくなりたい」だったが、対してYOSHIKIが掲げる「破壊の美学」は「ドラムを叩きながら血を吐いて壮絶な最期を遂げる」といったようなものだ。いわばインテリな文学系と暴走族ノリの体育会系、双方が交わるはずがないのである。

音楽ルーツを見ても、BUCK-TICKはニューウェイヴやポジティブパンク、×はメロディックスピードメタルである。まったく異なるジャンルにあるバンドを同列に語ることができる、これがヴィジュアル系という言葉の都合の良さでもある。同時に「音楽を表している言葉ではない」からこそ起こる悲劇に皆が振り回されていった、それが90年代のヴィジュアル系シーンである。

### ヴィジュアル系と呼ばないで！ラルク『ポップジャム』事件

ヴィジュアル系呼称問題で、何かと話題になるのがL'Arc~en~Ciel（以下、ラルク）の『ポップジャム事件』だ。NHKの音楽番組『ポップジャム』1999年5月1日放送分の収録時のこと。司会の爆笑問題・太田光がラルクのことを「ヴィジュアル系」と呼んだことに対し、ベースのtetsu（現・tetsuya）が怒り、収録途中にもかかわらず帰ってしまったという事件である。

「tesu が太田にキレて帰った」という誤解もあるようだが、太田は「俺たちにはむしろ『すみません』って。本当に真摯な態度で、『申し訳ありません』って帰って行った」と、自身のラジオ番組で一部始終を語っている。事件より20年経った2019年2月5日に放送された『火曜JNN 爆笑問題カーボーイ』（TBSラジオ）でのことである。

同番組での太田の発言を要約すれば、

- 収録は1日3本撮りで、ラルクは3回に分けて3曲歌ってもらい、その途中で他のアーティストを挟むという収録スタイルだった。ラルクが3曲続けて歌うと、お客さんが他のアーティストを観ずに帰ってしまう恐れがあった。

- ラルクは自分たちのことを「ヴィジュアル系」と呼ばれたくなかった。それをNHK側に再三伝えていた。

- しかし、司会者である爆笑問題にそのことが伝わっていなかった。

- 1曲目が終わったのトークコーナー。ラルクメンバーの顔写真をモーフィングするという企画で、合成されたNydeの写真を見た太田が「新しいヴィジュアル系だね」と発言。それによって、2曲目の収録は気まずい空気の中で行われ、3曲目の収録を放

棄した。

つまりはラルク側スタッフとNHK側との齟齬より生まれた事件であった。tetsuは自身の単行本『哲学。』（2004年ソニーマガジンズ）にて、「ちゃんとスタッフが打ち合わせをしているところなんです、それが出来ていなかった」「NHKさんにも爆笑問題さんにも何も悪いところはない」「うちのスタッフに対してもっとちゃんとやってくれという意味での行動だった」と語っており、太田は先述のラジオにて、「太田さんには何も責任もありません。ただ、僕はNHKとそういう約束なんで、ここは譲れないんです、すみません」とtetsuに言われたことを明かしている。

この事件は、「スター気取りのラルクのわがまま」といったようなマイナスエピソードとして語られることもあるのだが、己の美学を追求しているだけなのに、流行の一環として後追いの言葉で括られることに對する反発であり、さまざまな偏見を持たれてしまった「ヴィジュアル系レッテル」への反抗でもあった。tetsuは先述の単行本にて「ヴィジュアル系は人を見た目で判断する差別用語」とはつきり述べている。ゆえに事件当時、ラルクファン以外からも賛同の声があった。それだけ、ヴィジュアル系という言葉は独り歩きしてい

たのである。

そういったアーティスト当人によるヴィジュアル系ブームへの反抗はもっと前からあった。私が違和感のようなものを覚えたのは、LUNA SEAが『ミュージックステーション』（テレビ朝日系列）に初登場したとき（1994年）のことである。それまでロックに興味を持っていなかった女の子たちが次の日から「LUNA SEAのボーカル、カッコいい」と言い出したことをよく覚えている。ただ、私の違和感はそうした世間の反応ではなく、髪が短くなり、薄いメイクになったRYUICHIが他の出演者に混じって爽やかに話している姿だった。

このシーンのバンドマンといえば、メイク同様に浮世離れた派手な長髪がシンボルであつたし、それがミステリアスな雰囲気醸し出す大きな役割を果たしていた。しかしこの時期、RYUICHIをはじめ、櫻井敦司（BUCK-TICK）、YOSHIKI（X JAPAN）、hyde（L'Arc〜en〜Ciel）とつた面々が次々と自慢の長髪をバッサリと切ってしまった。TUSK（ZI:KILL）は坊主頭になり、メイクも落とした。

それは当人たちの「もうビジュアル面での奇抜さは必要ない」という決意もあつただろう。しかしそれよりも、広まりつつあつたヴィジュアル系という言葉、ムーブメントに対

する反抗のように思えたのだ。シーンで見れば、ひとつの時代を築いた様式美の終焉だと感じた。しかし、時はまだヴィジュアル系ブーム前夜である。にもかかわらず、既に先人たちは「まだ長髪でメイクしてるの?」といった域に入っていたのである。

### 脱ヴィジュアル系とソフト・ヴィジュアル系という風潮

そうした「脱ヴィジュアル系(=脱ヴィジュアル系)」の風潮も見てきたところで出てきたのが、SIAM SHADEだった。LUNA SEAと同じく東京・町田プレイハウスというライブハウスを拠点に活動していた彼らは、インディーズの頃は長髪にバッチリ濃いメイクで粧し込んだバンドであったが、音楽性と方向性の転換により髪を切り、メイクをやめてメンバーみんなで海水浴に行き、おもいつきり日焼けしたという、ファンのあいだで語り継がれる微笑ましいエピソードがある。

そんなSIAM SHADEは1995年10月にメジャーデビュー。ハードロックテイストの硬派なバンドといった印象だったが、いつのまにかヴィジュアル系の括りに入れられていた。ヴィジュアル系畑とは無縁の音楽オーディション番組『えびす温泉』(テレビ朝日)から出てきたCASCADE(1995年11月メジャーデビュー)など、従来のヴィジュアル系

メージとは異なるスタイルのバンドまでも、知らぬうちにヴィジュアル系の括りに入っていたのはブームの功罪でもあるだろう。ヴィジュアル系の多様化といえれば聞こえはいいが、うかうかしていると、筋肉少女帯やシャ乱Qまでもヴィジュアル系とされてしまう時代だった。そんな中で、括られまいと「我々はヴィジュアル系ではない」としきりに口にしていたのがTHE YELLOW MONKEYの吉井和哉で、逆にSEX MACHINEGUNSは戦略として、あえてヴィジュアル系を名乗ることで成功したバンドである。

ヴィジュアル系に明確な定義は存在しないのだが、その括りは次第に広くなり、悪くいえば大雑把になっていった。SOPHIA（1995年10月メジャーデビュー）しかり、短髪で耽美臭がしない爽やかなソフヴィ（ソフット・ヴィジュアル系）と呼ばれるようなバンドも出てきた。BUCK-TICK『悪の華』（1990年2月）やX『Jealousy』（1991年7月）の退廃美溢れるジャケットアートワークに見られる世界観こそが至高と想っていた黒服世代にとっては、非常にモヤモヤとした時代でもあった。

そんなモヤモヤを断ち切ってくれたのは黒夢くろゆめだった。ヴィジュアル系黎明期バンドの中でも、ダークで猟奇的な色を持っていたバンドであったが、1994年のメジャーデビュー以降、ポーカルの清春きよはるはファッションリーダーとしての存在を強めていった。ソフヴィ

界限に多大な影響を与えたが、形骸化しすぎたヴィジュアル系ブームを断ち切るように、ノーメイクで一気にパンキツシユ路線に突っ走った。そんな男気に魅せられたロックファンは数知れず。

黒夢は、黒服系、ソフヴィ、パンクという、移り変わりの激しい90年代の日本のロックシーンを象徴するような路線変更を遂げたバンドだった。

バンドがメイクをすることは自己表現のひとつであった。まず音楽があつて、その世界観を表すための手段としてメイクをした。人と違うことをしたい、人よりも目立ちたいという表現だった。だが、いつのまにか「ヴィジュアル系」という、音楽を差し置いて見た目だけで判断されてしまうような言葉ができた。そしてブームによつて、「ヴィジュアル系をやりたいからバンドを始める」という人が増えていった。目的が先か、手段が先かという話なのだが、自己表現のためにメイクをしていたバンドからすれば「なにそれ??」という話なのである。

## ロックフェスが生んだヴィジュアル系差別

「洋楽ファンのみなさん初めまして。僕らがあなたたちの大嫌いな日本のヴィジュアル系バンドです——」

1999年8月、富士急ハイランド・コニファーフォレストで開催されたマリリン・マンソン主宰のロックフェス『BEAUTIFUL MONSTERS TOUR 1999』でPIERROTのボーカル、キリトが言い放ったこの言葉から始まったMCは、洋楽至上主義の音楽ファンをはじめ、PIERROTの出演を快く思わない声に対する皮肉でもあった。しかしながら、それは当時のヴィジュアル系バンドの偏見にまみれた立ち位置を表すものでもあった。

1997年、日本における本格的なロックフェスティバルの先駆けである『FUJI ROCK FESTIVAL』（以下フジロック）が初開催された。フェス文化の幕開けであるが、このことが大きく意味を持ったのは、世界中のバンド、アーティストが日本に集結してライブを行うということ、そして、それ以上に大きかったのは海外アーティストと日本人アーティストが同列に並んだことだ。

海外アーティストと日本人アーティストが同じステージで同じ扱いでライブを行う。長年にわたり洋楽優位とされてきた我が国のロックシーンの中で、このことはシーンにとってもリスナーにとっても大きなことだった。『洋楽コンプレックス』と呼ばれたものもあつたし、海外バンド、いや、『外タレ』と日本のアーティストが共演するのは、『来日公演の前座』が当たり前前だったのだ。『オーブニングアクト』なんていう、ちよつと聞こえの良い言い方をするようになったのもちよつとこの頃からである。

反面で、表立って公言されたわけではないが「ヴィジュアル系はフェスに出られない」という暗黙の諒解ができた。フェスによつて緩和された節はあるものの、現在でも根強く残っているところも多い。その理由は明確にされているわけではないが、見た目だけで音楽が正当評価されないどころか、「見た目重視だから音楽的に劣っている」という偏見があつたのもあながち間違いではないだろう。現に土屋昌巳 (ex. 一風堂、ジャパンサポートなど)、ミック・カーン (ex. ジャパン)、DJ KRUSHらとともに当時ドラムンベースなどの前衛的な音楽を探求していたLUNA SEAのSUGIZOは、この1997年のフジロックへ出演予定だった(出演日であった2日目は台風により開催中止)。Hideはフジロックからの誘いがなかったことを悔しがり、呼ばれないのであれば自らやればいいと、オールナイトクラブイ

ベント『MIX LEMONed JELLY』の開催に至ったという噂もあった。日本でのロックフェス開催を誰よりも待ち望んでいたであろうhideのことだ、あながち噂とは言い切れないのかもしれない。

### ヴィジュアル系治外法権バンド、BUCK-TICK

ヴィジュアル系シーンのど真ん中にながら、そうしたヴィジュアル系差別を受けなかったバンドがBUCK-TICKである。ヴィジュアル系黎明期を代表するバンドだが、海外の最先端の音楽とサウンドを呑み込み続けた。その作品ごとに様変わりしていく貪欲な音楽探求、前衛具合は「ジャンル分け不要」とまで言われた。そうした音楽性への評価なのか、はたまた海外の気鋭アーティストが参加したリミックスアルバム『シェイプレス』（1994年8月）という免許符があったからなのか、本人たちはいざ知らず、評論家やライターを含めた周囲に、「BUCK-TICKはヴィジュアル系ではない」という風潮が自然と出来上がっていた。

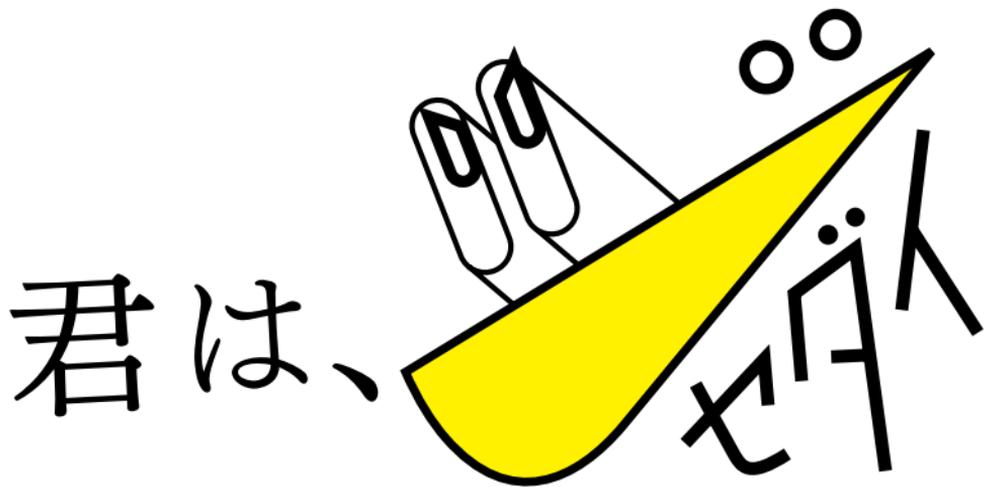
BUCK-TICKは先述のPIERROTと同く『BEAUTIFUL MONSTERS TOUR』に出演している。本来であれば、前1998年にマリリン・マンソンとhideが共演することが予定

されていたことに意を込めて、hideのカバー「DOUBT '99」を演奏。感動と賛辞を呼び起こした。加えて、マリリン・マンソン側に気に入られたのか、2003年、『Grotesque Bu rlesque』ジャパンツアーのサポートにも抜擢されている。そして、同年の『SUMMER SO NICK』へ出演。客入りこそ大盛況というわけではなかったものの、洋楽ファンからも歓迎された感すらある。

『BEAUTIFUL MONSTERS TOUR』について補足しておきたい。本イベントは2月から3月にかけて、アメリカとカナダで開催されたロックフェス形式のツアー。マリリン・マンソン主宰で、当初はコートニー・ラヴ率いるホールとのダブルヘッドライナーだったが、ツアー途中でトラブルによりホールが離脱。そんな、いわくつきのフェスが日本に上陸したのである。

8月7日、8日の2日間開催され、PIERROTは1日目、BUCK-TICKは2日目に出演。ラインナップを見れば、ヘッドライナーのマンソンは両日出演、8日は、ビートルズとメタリカの融合」と評されたイギリスのバンド、ザ・ワイルドハーツに、同じくイギリスから当時気鋭のミクスチャーバンド、ワン・ミニット・サイレンス。それを迎え撃つは我ら

が BUCK-TICK と、hide の太鼓判もあって人気急上昇中だった OBLIVION DUST である。物議を醸した PIERROT の出演日7日は、アメリカのハードロックバンド、モンスター・マグネット、ハードコアパンクのミスフィッツに加えて、スラッシュユメタルのパイオニア、泣く子も黙るメガデスときたもんだ。そんな強面こわもての猛者相手もさにメジャーデビュー2年目の PIERROT が孤軍奮闘したのである。完全アウェイもいいところだった。



君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

**ジセダイイベント**

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

**ジセダイ総研**

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

**星海社新書試し読み**

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

**行動せよ!!!**